霞ヶ浦の豊かな水環境を目指して
～釣り人の想いから始まった湖岸清掃活動とその後の発展～

NPO法人　水辺基盤協会　（茨城県）

1　はじめに

NPO法人水辺基盤協会は、「後生に残そうゴミのない美しい霞ヶ浦！」を目標に、魚釣りや清掃活動を通じて、ゴミのない美しい水辺や健康な水域を、次代を担う子供たちに残すための活動を30年に渡り行っています。それは、湖岸域のゴミを回収除去することで、健康的な生き物が増え、海に流れ出るゴミを未然に防ぎ、それが地球を守ることへとつながると信じているからです。

また、様々な要因による水生生物等の減少に対して、その保全と再生のための活動にも取り組んでいます。併せて、人と湖との関わりや関心が低くなっている時代、魚釣り体験を通して親子で水辺にふれあい、水辺の生き物や環境について学び、自然を大切にする気持ちを育むことを願って、環境学習を行っています。

協会の会員数は現在300名程で、たくさんの釣り人の有志も集まり、活動を支えて頂いてます。

2　霞ヶ浦の主な課題

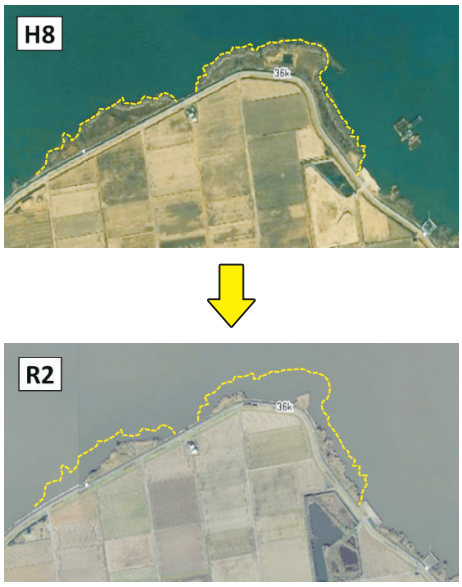
日本第2位の面積を有する霞ヶ浦は、元々汽水湖でしたが、塩害防止や水資源の安定確保を行うために、1975年から最下流に位置する常陸川水門で水位調節が開始され、淡水湖へ変化してきました。また、1960年代からの流域人口の急激な増加に伴う水質悪化や湖岸堤の整備なども相まって湖内の水環境は大きく様変わりしました。近年の水質は、COD値は7前後で推移し、環境基準値を超えてはいますが、改善されてきました。

霞ヶ浦の主な課題として、1点目は不法投棄されたゴミです。以前よりは大夫減少していますが、まだまだ大量にあります。ゴミは、ペットボトルや大型家電製品の他、農薬や塗料、さらに注射器や薬品など危険な物もあり、飲料水として利用している霞ヶ浦には、あって欲しくないゴミです。

また、これらは海に流れることなく湖底や湖岸に堆積した状態です。

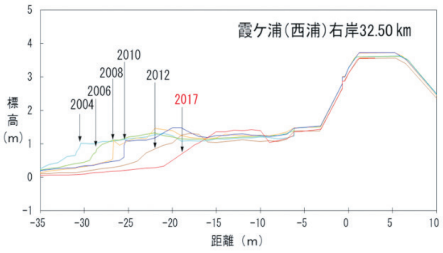
（写真）湖岸の漂着ゴミ

2点目は湖岸植生帯の減少です。一部で養浜などの保全対策事業も行われてますが、自然湖岸では、安定した水位と波浪等により、残念ながら止まることなく確実に減り続けています。水生生物の生育・繁殖場として必要な水際のエコトーンの減少は、非常に深刻な状況にあると思われます。



（写真）湖岸植生帯の減少

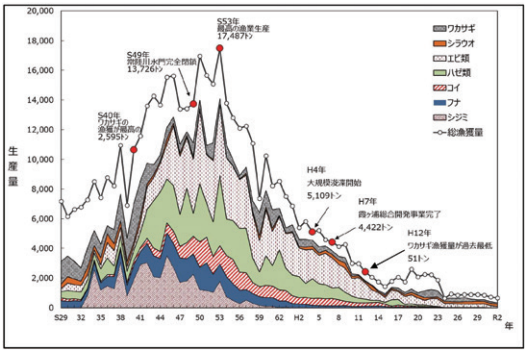
3点目は霞ヶ浦の代表魚種、ワカサギの減少です。地球温暖化に伴う水温上昇により、ワカサギが適応でき



（図）湖岸水際部（植生基盤）の浸食状況（一例）

ない水温となってきた事が主な要因と推定され、漁業へも大きな影響を与えています。

こうした状況を少しでも改善し、霞ヶ浦の豊かな水環境を目指して、私たちは活動しています。



（図）霞ヶ浦（北浦）における魚種別生産量
（出典：霞ヶ浦の水産　令和4年10月　茨城県）

3　水辺を見てきた釣り人の思いから始まった湖岸清掃活動

(1)「53PickUp！」

私たちの基幹となる活動として、「53PickUp！（ゴミピックアップ）」があります。

このスローガンは、「53PickUp！は地球を救う」です。水の惑星と言われている地球ですが、海洋汚染が大きな問題になっています。海は地球の生命の根源ですが、淡水域のゴミを拾い、海へ流れ出るのを阻止しすることも地球を守る事に繋がると考えているからです。

そして私たちは「ゴミのない釣り場で魚釣りを楽しみたい！」、「自分たちの水辺は自分たちが守る」という思いから、1995年に釣り人による釣り場のゴミ拾いイベントとしてスタートしました。しかし、当時の霞ヶ浦の水際には溢れるほどのゴミがあり、その処理の難しさが大きな課題でした。陸域のゴミは自治体、湖内のゴミは国土交通省というように、ゴミの所在により処理の行方が異なることなどから、行政に処理の協力が頂けませんでした。

それならと、参加者から参加費を徴収してゴミ処理費用に充当することにしました。最初は、清掃活動のボランティアでお金を取ることに異論を唱える人も多くいましたが、事情を説明すると、「霞ヶ浦で釣りをしたり、霞ヶ浦の水を飲んでるからね。。。」これが皆さんからの回答でした。他人任せではなく、拾ったという責任の下で自分たちがその処理まで行う。この自助自立を目指したボランティアスタイルは、日本で、いや世界でも初めての試みだと思います。

その後、私たちの活動が行政にもご理解が得られ、処理の協力を得られるようになりましたが、大人1,000円の参加費を徴収するスタイルは続けています。この強みは万が一、私たちの清掃活動がどこからも支援も協力も得られない状況に陥ったとしても清掃活動を行い自ら処分までできるということです。自助自立の精神が生きてきます。

53PickUp！は年に2回開催し、令和7年5月に56回目の開催となりました。

毎回300名以上の方に参加頂いてますが、現在頂いた参加費は、軽食配布、クイズ大会、抽選会、フリーマーケットなどに充て、家族で楽しめる清掃活動イベントとして運営しています。

私たちが子供たちに伝え残す活動として、水辺の清掃活動はあって然るべきと思います。魚釣りが縄文時代から続く伝承文化であるように、釣り場の清掃活動も伝承文化だと考えてます。いつの日か、拾うゴミのな

（写真）53PickUp！清掃後の集合写真

（写真）53PickUp ！の参加者

（写真）集められたゴミ

い釣り場にしたいと思っています。

また、この取組みは全国の釣り人にも波及し、各地で参加費を徴収する清掃活動「53PickUp ！」が開催され、その数は14箇所に及び、年間で最多で20回以上が開催され、水辺のゴミ回収に努めています。

（「53PickUp ！」の活動は、テレビ東京の報道特別番組「地球共生」の第6部でも紹介されました。https://www.tv-tokyo.co.jp/kyosei/program06.html）

(2)「防塵挺身隊」

防塵挺身隊とは、読んで字の如く、自らの身を挺して水辺に迫り来る塵芥を防ぐ事にあります。胴長を履き、釣り用のボートを使い、陸上からは攻略できない水中や湿地帯のゴミを回収します。比較的狭いエリアを集中的に行う清掃活動です。

2003年からスタートし、年6回の開催ですが、台風後など湖岸に大量のゴミが漂着したときは、緊急的に出動します。

参加者は毎回40名程で、令和7年4月までに117回開催されました。

こちらの参加費は500円ですが、処理費は行政にご協力を頂いているので、参加費は活動後の反省会での昼食代等に充てています。反省会では、国土交通省霞ヶ浦河川事務所や霞ヶ浦導水工事事務所、自治体職員との情報交換など、参加者同士のコミュニケーションの向上を図っています。

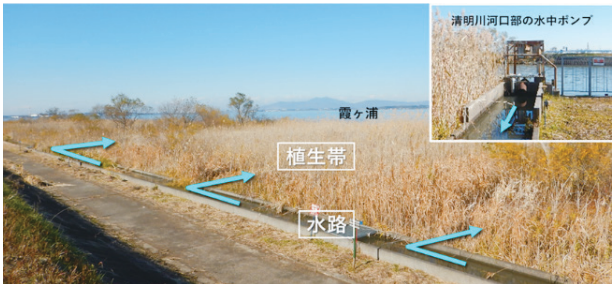
（写真）「防塵挺身隊」活動の様子

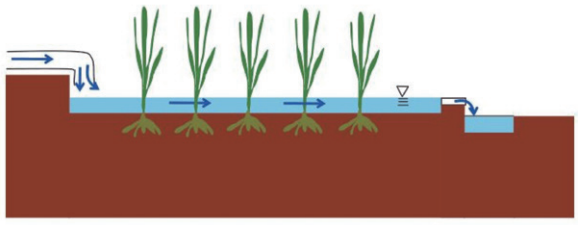
4　既存施設の有効活用と新たな価値の創造

(1) 浄化施設の復活

2017年から、水辺の生き物を増やすための新たな活動が始まりました。霞ヶ浦への流入河川の一つである清明川の河口から湖岸にかけて、国土交通省霞ヶ浦河川事務所が整備した「清明川植生浄化施設」があります。

（写真）清明川植生浄化施設全景





（写真・図）浄化施設の仕組み

当時、水質が悪化していた霞ヶ浦の浄化事業の一環として、流入河川からの汚濁負荷量を減らす目的で1996年に完成し稼動しました。施設は延長950m、幅50mの植生帯に、清明川河口付近からポンプで汲み上げた汚濁水を通過し、窒素やリンの除去を行うものです。その後、2010年にポンプが老朽化で壊れ、清明川の水質も改善傾向であったことから稼動が停止され、植生帯は樹林化が進行し荒れ果てた状態になっていました。

しかし、浄化施設内の水路や植生帯には、ポンプによる水の動きと併せて様々な生き物が生息・繁殖しているので、管理者である霞ヶ浦河川事務所へ施設の再稼働を熱望し、環境学習など施設の新たな活用方法を提案してきました。

その後、この思いが届き、霞ヶ浦河川事務所と連携して、施設復活に向けた活動が2017年にスタートしました。偶然にも別事業で不要となったポンプがあり、規模は元の1／10の大きさですがそれを流用して頂き、施設に水を流せることなりました。

草刈りや火入れ、生物・水質観察、コンクリート水路の多自然化などの活動を毎月2回以上、10名程のスタッフで続けてきた結果、現在は植生帯もきれいになり、景観も改善し、魚類や二枚貝も確実に増えてきました。また、それらを捕食する鳥類等も増え、生物多様性向上にも寄与できたと感じています。植物ではハンゲショウ、ノウルシ、ミゾソバなどのタデ科の植物やマコモ、ショウブ、ヤナギトラノオ（絶滅危惧種）なども確認できました。

（写真）維持管理作業（草刈り、火入れ等）の様子

（写真）水路での魚類調査の様子と調査結果

(2) 施設の新たな活用

2022年からは、この浄化施設内の水路や湿地で環境学習を年2回開催行っています。

内容は、親子を対象にした魚釣り体験です。1家族に1人の講師が付き、魚や釣り具の扱い方など丁寧に教えます。子供たちが釣った魚は水槽に入れて観察し、併せて水質調査やプランクトン観察、湿地内の探検などを行っています。また、ライフジャケットを着用して頂き、水辺の安全確保の必須アイテムであり、自分の身は自分で守ることを教えています。

参加者のアンケート結果では、満足度は常に100％と高く、参加申込みも予約開始後にすぐに埋まるなど、子育て世代にニーズがとても高いと感じました。この体験を通して、縄文時代から続く釣り文化の伝承と、たくさんの親子が水辺にふれあう機会が増えて、霞ヶ浦の水環境にもっと関心を持って頂ければと願っています。

（写真）環境学習の様子

（写真）参加者・スタッフ集合写真

(3) 施設機能の向上

2023年1月には、さらに生き物を増やすため、施設内に魚道を設置し、湿地の掘削作業を行いました。

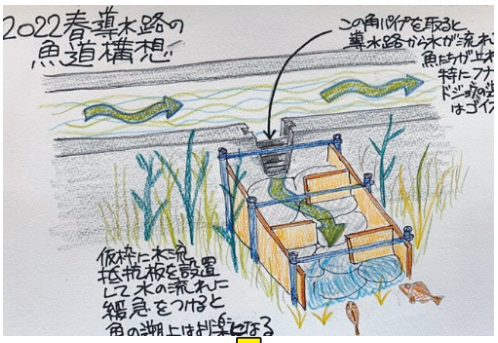
このアイデアは以前から考えていたのですが、日本河川・流域再生ネットワークが事務局である『水辺の「小さな自然再生」現地研修会』の開催地として選定され、研修会として行いました。この研修会は、様々な主体が協力、学び会い、仲間を増やし育てていく事が大きな目的です。

「浄化施設の水路と湖をつなぐ魚の通り道づくり」をテーマに、午前中は座学、午後は手作りの魚道づくりと湿地帯の水路作りを実践し、手づくりでできるエコアップの手法を参加者と共に学び合うことができました。

琵琶湖で活動している団体など遠方からもご参加頂き、総勢32名で「小さな自然再生」を学び、参加者各々が発見や気付きがあり、今後の活動のヒントなども得られ、人材育成にも繋がるとても充実した研修会となりました。

完成後の5月には早速、大量のフナが湖から湿地へ遡上・産卵し、効果を確認することができました。しかしそれ以上に、団体活動として大規模な自然再生事業は出来ませんが、少人数でも少しの予算と工夫次第で、何かできる事もある。ということを改めて実感できたことが良かったと思います。

http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/files/2023/03/JRRNtraining20230114report.pdf



（写真）魚道構想と実際に設置した魚道

（写真）湿地の掘削作業

（写真）完成後の集合写真

（写真）整備後のフナの遡上、現地で採取された2枚貝やタウナギ

関係機関のご協力のもと、廃止になりかけていた施設を復活させ、水質浄化目的以外の新たな利用価値を創造する事ができたことが何より大きな成果であったと考えております。

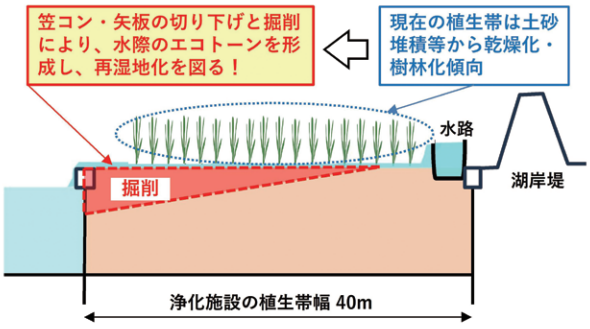
これら清明川植生浄化施設での新たな取組みは、令和4年度に霞ヶ浦河川事務所が「全国多自然川づくり会議」（第4分科会）で代表事例として選定・表彰され、令和6年度には、「手づくり郷土賞」（国土交通大臣賞）を受賞することができました。

https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/main/kankyou/tashizen/gaiyou_R04.html

https://www.mlit.go.jp/report/press/sogo03_hh_000340.html

5　今後の更なる発展に向けて

各活動を末長く継続していくために、人材育成や広報等の充実と併せて、学識者や団体・企業との連携方策など、新たな参加者・応援者の拡大と関わりを模索していきたいと考えています。

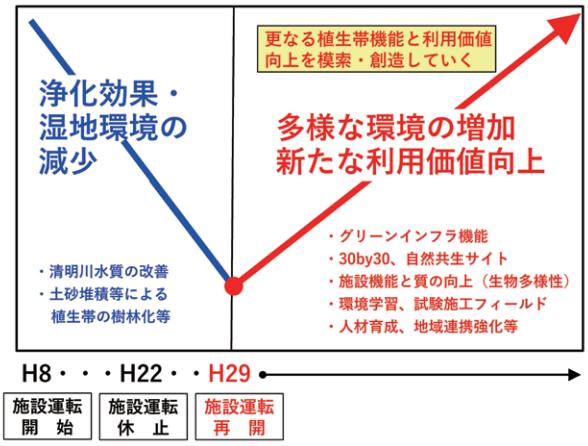


（図・写真）湿地機能向上の試験施工イメージ

また、湖岸植生帯の保全・再生は、これまで国や県でも様々な事業が行われてきましたが、減少が止まらない状況です。清明川植生浄化施設の植生帯は鋼矢板護岸で囲まれているため、面積は減少しません。約1kmに渡る施設は、多様な湿地環境を新たに創出するなど、質の向上を図ることや、今後の保全対策を考える上での試験施工箇所としての利用可能性もあると考えます。

さらに、近年増加しているサイクリング利用者の休憩場所（リバースポット）や自然共生サイトとしての活用、及びグリーンインフラとしての効果なども考えられます。

霞ヶ浦の水質や水生生物、住民の関心なども時代と共に変化してきましたが、私たちの活動ポリシーは、普段から魚釣りや飲料水として利用している「霞ヶ浦への恩返し！」です。この気持ちをいつも忘れずに、霞ヶ浦のために何ができるか？　スタッフ皆で考えながら今後も活動を続け、発展させて参ります。



（図）植生浄化施設が持つ機能と活用効果イメージ

NPO法人　水辺基盤協会　（茨城県）